

漆黒の翅

登場人物

ファル

本作のヒロイン。黒髪のロング

家は少しお金持ちであるが、継母にいじめられている。

偶々天使が教会で倒れていたファルを拾いそこから世話をする。

サマエル

銀髪の上位天使。

デウラレル国の管轄になる。

ファルを溺愛している。

マルエルとは双子で兄はサマエル。

マルエル

金髪の上位天使。

デウラレル国の管轄になる。

ファルを溺愛している。

サマエルと双子で弟はマルエル。

1 話

「まだ仕事が終わらないのかい、この役立たずのドブネズミ」

『…申し訳ありません』

「口じゃなくて手を動かしなさい！ ったく、こんな使えないドブネズミ、旦那様もさつさと捨ててしまえばいいのに、なにを考えているのかしら」

ファルは継母と話している時に咄嗟に荒れた手を後ろに隠した。

継母に見つかれば「汚いドブネズミ」と言われかねない。

何かに付けてファルはイジメの対象にされる。

「隠したその手はなんだい？もしかして何か盗んだんじゃないだろうね？」

『…ちが、います』

ファルは手を出し何もないとアピールした。

「だったら、さつさと動きな！それ以外、なんの役にも立たないドブネズミ！」

継母はそう言うとなファルの頬を力一杯ビンタした。

『…っ』

「何してんだい！言われたらさつさと動きな。今日の分が終わらなかつたら晩御飯抜きだからね」

そう言いのこして継母はファルから離れた。

継母の姿がなくなつてファルはようやく安堵の息を漏らした。

「はあ、次は水汲み、ですね」

ファルは井戸に水を汲みに行き、家の中に運ぶ。
もう朝から何往復をしているのだろうか？

昼は過ぎていた。

今は真冬であり手がかじかみ痛い。

しかし、サボるわけにはいかない。

そんな事したら継母に痛めつけられる。

ファルに植え付けられた恐怖心、それだけがファルを突き動かす原動力であつた。



全ての仕事が終わった時には日を跨いでいた。
身体が痛い。

早く寝ないと朝は早い。

だけど、今日は大切な日。

急いで教会へと向かった。

ここはデウラレルと言う小さな国の北東にある小さな村。

村には医者はおらず、神父すら居ない小さな教会がいるだけの村だ。

ファルの家は豊かな方だ。

しかし、彼女が5歳の頃に母が亡くなった。

父はすぐに別の女性を妊娠させ継母がやってきたのだ。

継母の子供は両親に愛されている。

何事もなく幸せに育っている。

7歳になったファルは風呂には入れず、それどころか、ろくな食事も与えて貰えない。

働きバチの様に毎日、仕事と言う名の雑用の日々。

父親は継母のやっている事を知ってはいるが、ファル自身に興味がなく助けるどころか、母親が亡くなってから会話をした記憶すらない。

そんなファルだったが、1ヶ月に1度だけ至福な時がある。

教会のドアを開けると真っ白な羽を生やした金髪と銀髪の男性が二人が立っていた。

『天使様っ！！』

「ファル遅かったですね。心配していたのですよ」

金髪の天使、マルエルがファルを抱きしめた。

「今日も随分と、またイジメられたのか？」

銀髪の天使、サマエルがファルの頭を撫でる。

サマエルの言葉にファルは言葉を選びながら応えた。

『私が、仕事、遅い、から…だからっ、怒られた…だけ、です』

「ファル、頬が赤くなっていますよ。叩かれたのですか？」

ファルは素直に頷くとマルエルは彼女を抱きしめた。

「どうしてこんな可愛い子を、慈悲もない。もしかして悪魔なのでは？」

「どうだろうな。天罰を下したいのに、天使は人間に干渉してはならない。変な掟の所為で何も出来ない」

サマエルが悔しそうに言う。

ファルは首を横に振った。

『大丈夫です。私は、もう、慣れつ、てます、からっ』
「……」

「歳になるファル。」

子供の言うセリフではない。

どんな覚悟で放った言葉なのか。

サマエルとマルエルは悲しい気持ちが入み上げた。

「本当にあなたは強い子ですね。私達は助けてあげられない。私達に出来る事は身体を清め、温かい食事を出す事だけです」

『ありがとうございます。それ、だけで…十分です』

優しく言うマルエルにファルは微笑んだ。

7歳児、親に甘えたい年頃。

しかし、彼女の環境はそんなモノではない。

彼女を囲う極悪非道な生活環境。

十分な食事も与えられない。

それどころか十分な睡眠も休暇もない。

マルエルとサマエルはそんな彼女の環境に心を痛め、助ける事すら出来ない自分達を呪った。

「さつ、身体を綺麗にしよう」

サマエルが指を鳴らすとファルの服と身体。そして腫れた頬も綺麗になった。

「どうだファル？痛い所はあるか？」

『いいえ、指も綺麗っ！！ありがとうございます』

「良かった。さて今日はフカフカのパンと温かい鶏肉の入ったスープだよ」

『わあっっ！！ご馳走ですっ』

「今日の料理は上手く出来たよ」

「サマエルは料理が下手なのに代わろうとしませんよね。僕の方が料理は上手いの
に」

不機嫌気味に話すマルエルだったがサマエルは気にせずファルを抱き上げると足の
上に乗せた。

そしてテーブルの側に行くとファルに催促をする。

「ほら、自信作だから食べてくれ」

『はい、頂きます』

ファルが夢中になって食べているとマルエルはため息をついてサマエルに話しかける。

「それにしてもこの地区の管理がにたまたま僕たちで良かったですね」

「ああ、おかげでファルとは出会えた」

天使は担当地域を割り当てられる。

そして、この国の全体を担っているのがマルエルとサマエルだった。

人間には基本的に仕事以外で干渉をしてはならない。

天使の仕事は神の啓示を伝え、観測だけ。

しかし、たまたま来たこの村でファルは倒れていた。

それを見た二人は慌てて治癒魔法をかけ食事を与え、身なりを綺麗にした。

それ以来、ファルとの関係が続いている。

しかし、今行っている事は内密にしなければならない。

見つければマルエルやサマエルだけでなくファルにも神罰が下る恐れがある。

天界でも魔力が異常に高い二人は教会に結界を張り、他の天使や人間に見えない様になっている。

月に1回だけファルに会いに来て食事を振る舞っているのだ。そうしないとファルが死んでしまう。

「ファル…、俺達は無力だ。毎日会う事も、助ける事も出来ない」

辛そうにサマエルが言う。ファルは笑顔になつて答えた。

『大丈夫です。お二人のおかげで私は生きていられるのです。私は嬉しいです』
「ファル…」

「サマエル…今は嘆いても仕方がありません。それよりファルの食事を邪魔するのはやめなさい。特にその手！」

マルエルが指差しをするとファルの頭を撫でている。サマエルは「なぜ？」と不思議そうにこちらを見る。

「何がだ？」

「その撫で撫では僕がする予定だったのですよっ」

「前回しただろ？今回は俺の番」

「サマエルっ！！」

「賢いからってマルエルが偉いわけでは無いだろ？俺らは双子で上下関係なんて存在しない」

「…筋肉バカにファルを取られるのは許せないのですよっ」

「はいはい、でも兄貴は俺！一瞬でも俺が先にこの世界に生を成した。どうしても順位をつけるとしたら俺の方が優先だろ」

「…なんですか？喧嘩を売っていますか？」

「買ってやろうか？」

『あのっ…』

二人が喧嘩を始めようとした時、ファルがサマエルの服を掴み見上げて声をかける。

「ん？どうしたファル」

『お食事美味しかったです。…あの、有難う御座いました』

「そっか、まだ何かいるか？」

ファルは首を横に振って伝える。

『大丈夫です。お腹…いっぱいですっ』

ファルは満面の笑みで言う。とサマエルは嬉しそうな表情を浮かべる。その笑顔にマルエルは癒された。

だったが彼女を見てある事を聞いた。

「ファル、いつもその服を着てますね。お気に入りですか？…それとも」

『えっと…』

「今のは意地悪でしたね、分かっている聞きました。本当はもつと甘えて欲しいん

です。僕達はファルの味方です。だから：ほおら」

マルエルは突然何もない空間から服を数十枚出した。

「僕のお手製ですよ、どうですこのレース。素敵でしょ？」

『わあっ！お姫様みたいっ！』

「そこらの姫も敵いませんよ。何せ僕が作ったのですから」

『なんでも出来るなんて凄いですねっ』

「そうですね、サマルエルより僕の方が良いでしょう？」

「おい、それは卑怯だろ」

「サマルエルにはこんな芸当はできないでしょうし、ただの筋肉バカですから」

「マジで潰すぞ」

「天使がそんな汚い言葉使い、ああ恐ろしいです」

「マルエル：っ！！」

『天使様、あの、この服着てみたいですっ』

ファルの言葉にサマエルは戦意を失い笑顔で頷いた。

「おう、着てこい」

『はいっ!』

「おや、僕が着替えて差し上げますよ。もちろん魔法で」

マルエルが指を鳴らすと一瞬でファルの服が綺麗なドレスに変わった。

『綺麗…』

「ファル、僕は感無量です。ああ、もつと作ってくれば良かったです」

「どう考えても作り過ぎだろ」

呆れた様にサマエルが言うにファルは嬉しそうにマルエルを見る。

『こんなにあつたら幸せです』

「そうですか?…では魔法を掛けておきましょう。見えるのは僕達とファルだけ、

でなければあの意地悪ババア：おつと、間違えました。継母に売られてしまう危険がありますからね」

「それは賛成。あのババア最悪だからな」

サマエルの言葉に納得するとマルエルは指を鳴らす。
すると服に光が飛んでいった。

「これで平気ですね。見えるのは僕達3人だけ、着ていてもいつもの服に見えますから心配しないで下さい」

「所でよ、ファルはまだ馬小屋で寝てんのか？」

『はい、シーツを貰ったので藁の上にそれを被って寝ています』

「…なら俺が毛布もベッドも出して…」

『いえ…もし頂けるなら毛布だけで大丈夫です』

無理矢理でもベッドを出してやろうかとサマエルは思った。
しかし、見つければファルが折檻を受けるかもしれない。

これも無力な自分なのだと悔しく思ったサマエルはファルを見て真剣な瞳で言う。

「…そうか、ファルよく聞けっ！俺はいつかお前をこの地獄から連れ出してやる」
『…はい、天使様』

ファルは頷くとサマエルは納得をした。

『そろそろ帰らないと…』

「そうか、服と毛布は魔法で送ってやる。ファルも」

『…はい』

「あああああ」

突然奇声を出すマルエルにサマエルは苛立ちげに見る。

「うっさいマルエルっ」

「僕のファルがまた離れて行ってしまう。あのクソババアに虐められると思うと…、

怒りを感じます」

「それは同意」

二人は辛そうな表情でファルを見た。

『平気です。私にはお二人がいますから』

「ファル……約束します。必ずこの地獄から僕達が出してあげますからね」

『はいっ、それまで私頑張ります』

「それでこそ僕のファルです」

マルエルは嬉しそうに笑ってファルの頭を撫でた。

「さあ、今はあそこに帰りましょう」

その言葉にファルは頷くとマルエルは指を鳴らす。
ファルが手を振ると二人は振り返してくれた。

するといつの間にか馬屋にファルは戻ったのだった。

『有難う御座います、天使様っ』

ファルは暖かな毛布を被つて藁に包まれて眠った。

2 話

13年の月日が経ちファルは20歳を迎えた。

あいかわらず細身の身体であるが儚い美しさが見え隠れする。

だが、成長をすればするほど継母の体罰は酷くなるばかり。

その為身体のあちらこちらには傷が増えていた。

村の人達は見て見ぬふり、女性には嫉妬の目で見える。

そんな居場所の無い小さな村にも幸せはあった。

ファルは走つて岡の上にある教会に向かう。

1ヶ月に一回の約束の日。

『天使様っ！』

「ファルっ」

マルエルが教会の奥から飛んで来てファルを迎え抱きしめる。

「ああファル会いたくて堪りませんでした。ずっとずっと恋しくて」

『私も…天使様に会えるのを楽しみにしていましたっ』

「もう離れたくありません…痛っ、サマエル何をするんですか!？」

マルエルの後ろから現れたサマエルは拳骨で頭を殴ったのだった。

ファルはその様子にハラハラして見ている。

「おい、ファルはお前のモノじゃ無いだろ？独占するな」

『サマエル様、マルエル様、お二人に会えて嬉しいですっ』

「そうか、俺に会えて嬉しいか。：飯は食っているか？風呂には入れてもらえてい
るか？寝床は部屋になったか？変な男に襲われたりしてないか？」

『…えっと』

突然、サマエルは質問攻めにファルは戸惑った。

今度はマルエルがサマエルの腹パンチを食らわす。

「…つぐ！…何しやる」

「そんなに質問攻めにしたらファルが怖がるでしょう？僕のファルを怖がらせない
で下さい」

「はあっ！？何がテメーのだ！」

「何って僕のファルだと言ったのです」

「潰す」

「こちらこそすり潰してさしあげますよ」

サマエルとマルエルは二人で睨みあいをしていた。

ファルはオロオロしていたが、思わず二人の真つ白な服を掴んだ。

『あの、喧嘩は…やめて下さい。私はお二人と少しでも一緒に居たい…』

「…」

二人は黙るとファルの方を向く。

「そうですか、ぼく、とっ一緒に居たいんですね」

「はあ！？お、れ、とっ一緒に居たいんだろ？」

『あ、あの』

「つて言い合いは止めるか、所で…」

サマエルがファルの頬に手で触れると身体中の傷が消えた。

「最近怪我が酷くなっているな。ファルの美しさに嫉妬をしているのか、あのババア？」

「そうでしょうね、自分は老いていくだけの老害のくせに。嫉妬のあまりその様な事をするのでしょうか。なんと浅ましい」

「それな、魔界に堕ちればいいものを」

「ふっ、落ちるのは決定でしょう。あの様な女」

二人は天使とは思えない言葉を発する。

ファルが慌てて止めようとするにつこりと微笑んで彼女の方を見た。

「ファル今日はこのマルエルが食事を作りました。サマエルよりも美味しいですよ」

「はあ！？いちいち俺に突つかかってくるのはやめろ」

「おや、僕の料理があまりにも美味しすぎてファルがメロメロになるのを恐れているのですか？そうなってしまったら申し訳ありません」

「マルエル：粉々にしてやろうか？」

「そちらこそ」

『あのっ！』

ファルの声に二人は思い出したように嫌味を止める。

「悪い」

「すいません、ファル」

ファルの言葉に二人は謝るとマルエルは魔法で食事を出した。

『ふあゝ！！これっ、お肉ですか！？』

「そうですよ、そこらのカットイ肉では無く王家の者が食する程の物です」

マルエルの言葉にファルは不安になった。

『そ、そんな良いお肉を私一人で食べて良いのでしょうか？』

「気にする事は有りません。今までの苦勞に比べれば、このぐらいの贅沢は大した事無いのですよ」

胸を張って言うマルエルの言葉を聞いてチラリとサマエルを見た。
ファルと目が合うとサマエルは大きく頷く為どうやら良いようだ。
ファルは恐る恐る高級肉の料理に近づきフォークを持つ。
さして、肉にフォークを刺すとゆっくり口に運ぶ。
口の中に入れるととろける程の柔らかさだった。

『お、おいひいです』

「そうでしょう、このマルエルが料理をしたのですからとてもなく美味しいはずで
す。勿論こんな事をするのはファルだけです」

マルエルの言葉にファルは頬を赤らめる。

ファルは成長するにつれてサマエルとマルエルの優しさとは別に他の感情が芽生えていた。

そう、双子の天使をファルは異性として見る様になった。
しかし、そんな事は言えず想いを隠していた。

「ん？どうしましたファル？」

マルエルが不思議そうに覗くと、ファルは慌てて首を横に振る。

『な、何でもありません！お肉が美味しくてビックリしてしまいました』

「ああ、そうでしたか。それなら納得です」

マルエルは納得すると得意げにサマエルを見る。

「けつ、素材が良かったからだろ。そんな偉そうにする事か？」

「おや、サマエル嫉妬ですか？ファルが僕の事を褒めたのがそんなにも悔しいのですね」

煽るマルエルにサマエルが飛びかかろうとした時だった。
ファルが大声を上げる。

『やめて下さい！喧嘩はダメですっ』

「……」

二人は無言になり、ファルの方を見た。

「ファル、驚かせてすいません。これは僕達のコミュニケーションなんです」

「マルエルの言う通りだ、昔からお気に入りを巡って張り合っていたから……ついいつも癖でしてしまう」

サマエルが言うどファルはホッとため息をついた。

「そう、ファルは特別です。僕達にとって」

マルエルがファルの長く伸びた髪を掴むと口付けをする。

『なっ！？』

「ファル、こんな事をするのは貴女だけですよ」

マルエルの真剣な眼差しにファルは頬を赤らめる。

それを見てサマエルがファルを後ろから抱きしめた。

「おい、何二人で雰囲気出してんだ？俺も仲間に入れろ」

「また邪魔ですかサマエル？」

「当然だろ、ファルを特別に思っているのはマルエルだけじゃない」

サマエルの言葉にファルは体を硬くする。

『ひゃっ！』

ファルが戸惑っているが二人は気付かずに話し出す。

「さつさとファルから離れなさい」

「何で俺が離れないと行けないんだ？なあ、ファル…、俺に抱きしめられるのは嫌か？」

『…あ、あのっ』

茹蛸の様なファルを見てサマエルは頬にキスをする。

それを見たマルエルが苛立ちを露わにした。

「調子に乗っている様ですね、サマエル。消し炭にしてあげますよ」
「それはこつちのセリフだ。最近ファルにベタベタ触りやがって！」

ファルを抱きしめたまま怒気を放つサマエルだったが、外から大きな音が聞こえて振り返った。

「なんだ？結界が壊れた音がした」

「ええ、これは人間の仕業では有りませんね」

マルエルも音する方を見た。

するとそこには女性の天使と複数の防具と武器を持った天使が立っていた。

「昨日ぶりかしらサマエル、マルエル」

「アンジュ…」

マルエルが呟くとアンジュは扇子を出してファルの方に向けた。

「貴女が天使を誑かす悪質な人間ね？」

『た、誑かす…なんて』

「あらあら、現にここに誑かられた二人が居るじゃない。私の大事な婚約者がね」
『…こんやくしゃ』

アンジュの言葉にファルはまるで冷水を掛けられた様な気分になった。

「その二人は私の幼馴染であり、婚約者なの。どちらかが私と結婚をする事は神様からの決められた定め。それなのに人間の貴女が私から奪い取ったのよ？どんな手を使ったのか是非教えてほしいものだわ」

アンジュが言うとはファルに向かって扇子を投げた。
当たる寸前でサマエルが扇子を払い落とす。

「やめろ、ファルは何もしていない」

「誑かされたのサマエル？貴女は私の婚約者だったはずよ。なのにここ数年、様子がおかしかったからずっと調査をしていたの」

「調査だと！？」

苛立つサマエルだがアンジュは素知らぬふりで話を進めていく。

「ずっと、ずっと探っていたの。だけど尻尾を出さない二人に痺れを切らして私が神様に頼んだのよ。何処にいるのか探して欲しいって」

アンジュはにつこりと微笑むとファルを見て話を続ける。

「最初は神様も全く相手にしてくださらなかったわ。でも、私は諦めずに言つたの。将来の宰相と將軍になる二人に何かあつたらどうするのかつて。そしたら、神様は重い腰を動かして下さつたの」

アンジュがファルを睨みつけると話を続ける。

「探してみれば、まさか人間の女に誑かされているじゃない？それを知つた私の怒りはどれほどの物か分かる？アンタのせいで私は夫を奪われそうになつたのよっ」

『あの…』

「一体いつから禁忌を犯してその人間に干渉していたのかしら？ああ、考えるだけで腹が立つ。でも、それもこれで終わり…」

アンジュが片手を上げてニヤリと笑う。

「これより、罪を犯した二人の天使を捉えます。そして、天使を誑かした人間の女は魔界に落とします。そこで魔族のエサになりなさい」

そう言うときアンジュは手を振り下ろした。

後ろにいた数名の天使達がサマエルとマルエルを捕まえようと向かう。

「ふふ、逃げる事は出来ないわよ。サマエルとマルエルなら手こずるだろと神様からお達しで力を吸い取る水晶を頂いてきたの。今でも立っているのがやつとでしょ？」

ファルはアンジュの言葉を聞いて二人を見る。

今まで見たことも無いほどの冷や汗が出ており、表情は真っ青だった。

『天使様っ。大丈夫ですか！？』

「ファル、心配するな。…大丈夫だから」

サマエルの冷や汗が頬をつたって落ちる。

それを見てなんとか抱き止めながら支えるファル。

マルエルも心配になり振り向いた瞬間だった。

サマエルは他の天使に連れていかられ、ファルは拘束され床に顔を押し付けられる。

「いい気味だわ。まるでドブネズミみたいな。地面を這いつくばっているの姿はよくお似合いよ」

アンジュの言葉に言い返す力もなくそのままファルは他の天使によって気絶させられた。

「ファル！！テメェら！離せっ！」

「ファルっ！！」

なんとか動こうとするサマエルとファルの名前を必死に呼ぶマルエル。
本来ならこのぐらいなんて事無いのだが、水晶の所為で二人は力が出ない。

「お前らファルに何かしたらただで済まさない！」

「あら、その言葉は可笑しいわね。あの人間いじめられていたのでしょ？何故助けなかったの？」

アンジュの言葉にサマエルは黙る。

「本当なら簡単に助けられたのにしなかった。本格的な干渉をすれば天使では無くなるから。つまり、保身を取ったのでしょうか？それなのに…何故私達に怒るのかしら？」

「…」

「それはそうよね、天使が墮天した先は魔界だもの。そんな今世を捨ててまで人間一人を救うなんて馬鹿げているわ」

アンジュが優しく言う。とマルエルが睨みつけた。

「そうですね…、僕達がどうかしてました」

「分かってくれたの？マルエル！」

「ええ、分かりました。何が大事なのか」

「じゃあ私の元に帰ってくれるわよね」

アンジュの言葉に頷くマルエル。

サマエルは怒りでマルエルを睨みつける。

「…」

何かを咄くとマルエルは素直にアンジュのと元にゆつくりと行つた。

「さあ、帰りましょう。僕らを誑かした人間の女は地下牢にでも入れておけばいいのです」

「ふふ、流石将来の宰相。頭の良いマルエルは賢明な判断ね」

「ええ、そうですね。アンジュ行きましょ」

マルエルの言葉に気分を良くしたアンジュはファルの事等忘れマルエルに抱きつき微笑む。

「私の旦那様達帰りましょ」

そう言うとその場からアンジュ、サマエル、マルエルは姿を消した。

3話

冷たい床、いつもの藁とは違う感覚にファルは起きる。

『はい、どう？』

ファルは身体に痛みを感じながら起き上がった。周りを見渡すと真つ暗の中に牢屋があり、足を鎖で繋がれている。

『私…、牢屋？…っ！天使様、どこ？』

先程の事を思い出して柵に捕まり声を上げる。しかし、ファル以外の声は聞こえず静かだった。

『天使様…っ、天使様っ…天使様っ！』

あれからどうなったのか、ファルは心配でたまらなかった。只知道、知る術は無い。

そう思った時、何処かで何かのドアが開く音がする。

「おやおや、牢屋がよくお似合いですよ人間」

マルエルの声にファルは安心をする。

『天使様！動けるのですか！？怪我は有りませんか？』
「こんな時に僕の心配ですか？随分とお人好しの様だ」

マルエルは笑ってファルに近づく。

「いいですか人間。君とはもう二度と会う事は無い。君はもうすぐ魔界な連れていかれる。だから疫病神とはおさらばなんです。分かりますか？」

『えつと…天使様？いつもと…違います』

「当たり前でしょ、僕は天使で君は人間。君なんかのために僕が構ってやったのです。遊びとは言え感謝をしてもらいたいものです」

様子がいつもと違うマルエルを心配するファル。

しかし、マルエルは冷たい目でファルを見る。

「まだ分かりませんか？ 君をペットの様に遊んでいた時期は終わったのです。僕は宰相になります。そして、君は地獄に送られる」

「その通りよマルエル。貴女は理解が早くて助かったわ、サマエルはまだ誑かされたまま。だからお仕置きをされているわ」

突然来たアンジュの言葉にファルは哑然とした。

「天使様がお仕置きをされているんですか！？」

『そう、貴女の所為でね』

アンジュがファルに近づくとニヤリと笑う。

「貴女って本当に疫病神ね、貴女と関わった者は不幸になる」

『天使様が…』

呆然となるファルをじつと見つめるマルエル。
ファルが声を出そうとした時だった。

「アンジュ様！！大変です、サマエル様が我々の隙を見て逃げ出しましたっ」
「何ですって！？」

サマエルが逃げた。

その言葉にアンジュが焦っているのとマルエルが笑う。

「全く愚かな兄ですね。逃げ出すだなんて、アンジュ心配しなくてもサマエルの事なら僕が手を取る様に分かります。だから安心しなさい」

「そう…よね、マルエルが居るから大丈夫」

アンジュは困惑しながらもマルエルの言葉に安心をする。

「人間…、サマエルはきつとまだ君を助けたいたのでしょうね。だけど、僕は違う。一刻も早く、魔界におちて欲しい。その顔、二度と見たく無い」

マルエルの言葉にファルは肩を震わせた。

『わ、たし』

「早く魔族の餌食になり、僕のお遊びを忘れたらいいのです。ああ、魔族の餌食なら忘れるなど、意味が無いですね。その先に有るのは…ふふ」

『…天使…さま、私は…迷惑でしたか？』

ファルが尋ねるとマルエルはニヤリ顔でファルを見る。

「ええ、ずっと迷惑だと思っていました。君の存在が僕を自堕落させる」
『…御免なさい』

「謝っても、もう、遅い。君のせいで僕は少しの不自由をさせられまし」
『不自由？』

「宰相等面倒な事を引き受ける事ですよ。僕はもつと遊んでいたかったのに君と関わった事でそんな事になった。まあ、宰相を受け入れた事で今回の刑は軽くなり、直ぐに動ける様になったので別に良いですけどね」

マルエルはファル顔に近づけるとニヤリ顔で言う。

「早く魔界におちろ」

『…っ！』

震えるファルを見て満足したのかマルエルとアンジュは牢屋から出て行った。

『天使様…、ごめんな、さい…ごめんな…さい』

ファルの声が牢屋に響くのだった。

4 話

ファルは鎖で繋がれて牢屋から出される。
外に出ると村だと分かった。

「このドブネズミ！お前のせいで我が家は天使様に処分を下されたんだよ！どうしてくれるのさっ！」

ファルを見つけた継母が近寄り暴言を吐く。
だけど、ぼーつとするファルは継母の言葉が耳に入らない。

「聞いているのかい！？この疫病神がつ！」

『ご、めん…なさい』

そう呟いたファルは引っ張られて連れていかれる。
広場の先にはマルエルとアンジュが居た。

「ふふ、この日をどんなに待ち望んだ事かしら。やっと目障りな貴女を魔界に送る事が出来る」

「アンジュ、僕は忙しいのです。さっさと人間を魔界に連れて行きますよ」

マルエルの言葉にアンジュは鎖きファルにつけられた鎖を持つと空に飛ぶ。宙に吊られたファルは心が冷えていて何も考えれなかった。

そして、魔界に近づいた時アンジュがファルの鎖を手放す。魔界の地面に落ちたファルは動かない。

「さて、用は済んだわ。帰りましょうマルエル」

「そうですね、用は済みました」

ニツコリと微笑むマルエル。

瞬間、マルエルの背中の羽がどんどんと灰色になる。

「ま、マルエル！？どうしたの！背中が！！」

「やつとこの時が来ました。魔界におちる日をずっと待っていました」

マルエルの言葉に混乱するアンジュ。

「おや、存外アンジュは頭の回転が遅いんですね。僕はね、墮天したのですよ」

「だ、墮天！？」

マルエルはファルのそばに行くと鎖を魔法で消して抱きしめた。

「ファル、僕の愛しいファル。やつと魔界に堕ちてくれた」

『てんし…さま？』

「この時を何年も前から待っていました。準備が中々整わずもうしわけありませんでした」

マルエルの白かった服は真っ黒になり、羽も変わり果てていた。

「言つたでしょ？早く魔界におちろつて」

『はい』

「つまり、ここの支配者が僕達と言う事です。だから早く堕ちて欲しかった」

『…魔界の支配者？？』

戸惑うファルに微笑み抱きしめるマルエル。

すると、ファルの目にはある人物が瞳に写った。

『天使…さま！？』

「久しぶりだなファル。迎えが遅くなつて悪い」

そこに居たのは灰色になつた羽を持つサマエルだった。

「驚いているのか？俺が堕天した事を？」

『…どうして墮天なんてしたんですか？』

「墮天したのは、天界の縛りが俺には合わなかったからだ。誰が苦しんでも、愛しい女が辛い目に遭っていても何も出来ない。してはいけない。そんな掟が嫌だった」

サマエルはファルを抱きしめて微笑む。

「愛した女を救うためなら墮天も大した事はない。そして、俺は今日から魔界の支配者となった」

『天使様が魔王になったのですか！？』

「ああ、そうだ。そして、この世界の宰相はマルエルだ」

サマエルの言葉にマルエルが笑顔になる。

「僕は言っただしょ宰相になったと。あの時、天界の宰相とは言ってませんでしたよ」

『そ、そんな……。私のせいですか！？私のせいで墮天をされたのですか！？』
「違います。僕達が自ら選んだのです。むしろ巻き込まれたのはファルの方ですよ」

マルエルの言葉にファルは落ち込む。

「さてと、魔王は俺が倒し現王は俺だ。アンジュ、俺に送られた花嫁に手を出したら、お前を潰す」

サマエルの低い声にアンジュは動けずに居た。

「なんだ、動けないのか？ならば強制送還としようか」

サマエルが言うのとアンジュの頭上から魔法陣が現れる。

「ま、待ってサマエル！」

「二度と俺達の邪魔をするな、アンジュ？」

そう言うのとアンジュは魔法陣に吸い込まれ消えた。

「ファル、俺達の花嫁。行こうか？」

「ええ、サマエルと僕の大事な花嫁。これから悠久の時を愛し合いましょう」

二人に手を出されて思わず手を取ったファル。

ここにはファルをいじめるものも居ない。

永遠に愛される日々が待っていたのだった。

5話マルエルと甘い日常。

ファルは今日もベッドから動けずにいた。

「ファル、申し訳ありません。今回もやり過ぎてしまいましたね」

笑顔で言うマルエルは申し訳なさそうには全く見えない。

『天使…さ、ま』

「おや、まだその名残が有るのですね。マルエルと呼んでください」

マルエルは嬉しそうな表情でベッドから動けずにいるファルにの頬にキスをして言う。

『マルエル様…あの…お仕事が溜まっていると魔王様がいつてました』

「サマエル…、なんて事をファルに吹き込むのです。全く」

マルエルの半裸姿が見えてファルは目を逸らした。

サマエルよりは細身で有るが、鍛えられた肉体にロングの美しい金髪がファルを

魅了する。

綺麗な顔をしているのに、明らかに男と感じさせる色気がマルエルには有った。

『…マルエル様、あのお仕事が』

「今日は休みます。麗しの花嫁を置いて仕事など馬鹿げていますから」

『で、でも魔王様がお一人で大変な…』

「僕の愛しの花嫁、ここで他の男の名前を出すのは禁止です。ここでは僕の溢れる愛を受け入れて欲しいのです」

『あ、の…ま、待つて下さいマルエル様！』

「待てません。僕は何年待つたと思うのですか？あの数年。君を連れ去ろうと何度思つた事か…。やつと手に入つた宝物を手放すなんてすはず無いでしょ？」

フアルに軽く口付けをするとマルエルは手を引つ張り抱き止めた。

「さあ、僕の溢れる愛を受け取ってください」

マルエルの言葉にファルは何も言えずにそのまま受け入れた。

事情が終わりぐっすり寝ているファルを見て頬を撫でるマルエル。
すると突然サマエルが現れた。

「また、ファルに、無理をさせたのか？」

「なんですか、サマエル、いきなり」

「ファルの事を考えろ、お前、体力お化けだろうが」

「ちゃんと、手加減はしています」

「この現状の何処が手加減だ！？ファルが倒れた様に寝ているじゃないか！」
「それでも我慢をしているのです。文句を言わないで下さい」

サマエルは子供の様に言うのとマルエルは頭を抱えた。

「お前、墮天をしてから、理性が減ったな」

「自分に素直になったと言ってください」

「だからって加減が有るだろうが！」

「だからしているでしょ！」

二人は睨み合っていると、ファルが寝返りを打つ。
その姿に二人は静かになった。

「…僕達の花嫁は可愛すぎて暴走しそうです」

「それには同感だな」

マルエルの言葉にサマエルは大きく頷いた。

6 話魔王の愛

『魔王様、お仕事しないで良いのですか？』

ファルを抱きしめて空を飛んでいるサマエルは頷いた。

「俺ばかりに仕事を押し付けて自分だけ良い思いをするマルエルなんか知るか」
『えつと…後から怒られますよ？』

「勝手に怒らせとけ」

サマエルが不機嫌気味に言う。ファルは何も言えなかった。

「今日はお気に入りの場所に行く。そこでゆつくりするぞ」
『…はい』

ファルはサマエルの言葉に頷いた。

どのぐらい移動をしただろうか？

サマエルは小屋を見つけると降り立った。

「ファルどうだ？ここはお前が居た村の教会に似ているだろ？」

『はいっ、もう数ヶ月経つなんて信じられません』

小屋の周りに咲いている花を見て嬉しそうにするファル。

「魔界にも景色の良い所は意外と有る。城から出ていないから、たまには気分転換が必要だと思った」

サマエルが言うとなファルは嬉しくなりお礼を言った。

『有難うございますっ』

「別に良い。ファルがずっと辛いおもいをしていたのに助けられなかった。それが悔しかったからな」

『魔王様…、どうして私だったのですか？』

「何がだ？」

『その、私も確かに普通よりは良くない環境だったと思います。でも、もつと美し

く助けたい女性は他にも居たのではないかなって』

ファルの濁した言葉にサマエルは苦笑いをする。

「他にも劣悪な環境の子供は居ただろと言いたいのか？」

『…はい』

「倒れているファルを見た時、冷や汗が沢山出た。半身がなくなる様な気持ちになった」

『半身ですか？』

「天使にツガイと言う概念は存在はしないはずだがな。何故かそう感じたんだ。勿論、少女に欲情する程、変態ではない。親心が大きかった」

サマエルはファルの伸びた黒髪を掴んで口付けをする。

「ファルが日に日に成長するに従い俺達は魅了される様になった。他の男が送る視線に苛立つ程に」

『…』

「その度に、俺の半身だと叫びたくなる程だった」

『私は…恵まれすぎていると思うのです。他の人が魔王様達には似合うのではと

…』

「それは無いな」

キツパリと言うサマエルに戸惑うファル。

「俺達はどう見えても、上位クラスの天使だったからチャホヤされていたし、女には飢えていない。それに、ファルは勘違いしているが、割と冷たい天使の方だった。世界中を変えたいと思う程の立派な考えは無かったし、仕事もただこなすだけの毎日。人間なんて正直視界にも入っていなかった」

『でも…』

「ファルを見つけて月に一回の逢瀬をする様になりどんなに俺達の気持ちに変化があったか分からないだろ？生きる意味とはこの事なんだろうなと思ったよ。だからなファル」

サマエルはファルの方を向いて呟く。

「俺達にはお前しか居ない。代わりもない。だから逃げないで欲しい」

サマエルの美しさに見惚れながらファルは頷いた。

「そうか、なら良い」

ニツコリ微笑むと抱きしめるサマエルにファルは抱きしめ返す。

『私も、ずっとずっと愛してました。サマエル様達を独り占めして心の中ではほくそ笑んでいた酷い女です。お二人の思っているよりもずっと、嫌な女です。自分の保身ばかり考える。そんな私でもいいのですか？』

「魔王の女だ、それぐらいで丁度いいだろ？」

ファルは今まで隠していた感情を露わにするとサマエルに抱きついた。

『サマエル様どうか、どうか私を捨てないで下さい。一人は嫌ですっ』

「一人にはしない。あんな思いも二度とさせない。だから安心して良い」
『はいっ』

ファルは大きく頷くとサマエルの腕の中で本当の意味で安心をした。

（私の居場所。私の天使様…）

心で呟くと自らサマエルに口付けをした。

『愛してます魔王様っ』